

猫町

散文詩風な小説

萩原朔太郎

青空文庫

蠅を叩きつぶしたところで、蠅の「物そのもの」は死にはしない。単に蠅の現象をつぶしたばかりだ。――

シヨウペンハウエル。

1

旅への誘いが、次第に私の空想から消えて行つた。昔はただその表象、汽車や、汽船や、見知らぬ他国の町々やを、イメージするだけでも心が躍つた。しかるに過去の経験は、旅が単なる「同一空間における同一事物の移動」にすぎないことを教えてくれた。何処へ行つて見ても、同じような人間ばかり住んでおり、同じような村や町やで、同じような単調な生活を繰り返している。田舎のどこの小さな町でも、商人は店先で算盤を弾きながら、終日白っぽい往來を見て暮しているし、官吏は役所の中で煙草を吸い、昼飯の菜のこなど考えながら、来る日も来る日も同じように、味気ない単調な日を暮しながら、次第に年老いて行く人生を眺めている。旅への誘いは、私の疲労した心の影に、とある空地に生えた青桐みたいな、無限の退屈した風景を映像させ、どこでも同一性の方則が反覆している、人間生活への味気ない嫌厭を感じさせるばかりになった。私はもはや、どんな旅にも興味とロマンスをなくしてしまつた。

久しい以前から、私は私自身の独特な方法による、不思議な旅行ばかりを続けていた。その私の旅行というのは、人が時空と因果の外に飛翔し得る唯一の瞬間、即ちあの夢と現実との境界線を巧みに利用し、主観の構成する自由な世界に遊ぶのである。と言つてしまえば、もはやこの上、私の秘密について多く語る必要はないであろう。ただ私の場合は、用具や設備に面倒な手数がかかり、かつ日本で入手の困難な阿片の代りに、簡単な注射や服用ですむモルヒネ、コカインの類を多く用いたということだけを附記しておこう。そうした麻醉によるエクスタシイの夢の中で、私の旅行した国々のことについては、此所に詳しく述べる余裕がない。だがたいいていの場合、私は蛙どもの群がatterる沼沢地方や、極地に近く、ペンギン鳥のいる沿海地方などを徘徊した。それらの夢の景色の中では、すべての色彩が鮮やかな原色をして、海も、空も、硝子のように透明な真青だった。醒めての後も、私はそのヴィジョンを記憶しており、しばしば現実の世界の中で、異様の錯覚を起したりした。

薬物によるこうした旅行は、だが私の健康をひどく害した。私は日々に憔悴し、血色が悪くなり、皮膚が老衰に澱んでしまった。私は自分の養生に注意し始めた。そして運動のための散歩の途上で、或る日偶然、私の風変りな旅行癖を満足させ得る、一つの

新しい方法を発見した。私は医師の指定してくれた注意によつて、毎日家から四、五十町（三十分から一時間位）の附近を散歩していた。その日もやはり何時も通りに、ふだんの散歩区域を歩いていた。私の通る道筋は、いつも同じように決まっていた。だがその日に限つて、ふと知らない横丁を通り抜けた。そしてすっかり道をまちがえ、方角を解らなくしてしまった。元来私は、磁石の方角を直覚する感官機能に、何かの著るしい欠陥をもつた人間である。そのため道のおぼえが悪く、少し慣れない土地へ行くと、すぐ迷兎になつてしまった。その上私には、道を歩きながら瞑想に耽る癖があつた。途中で知人に挨拶されても、少しも知らずにいる私は、時々自分の家のすぐ近所で迷兎になり、人に道をきいて笑われたりする。かつて私は、長く住んでいた家の廻りを、堀に添うて何十回もぐるぐると廻り歩いたことがあつた。方角觀念の錯誤から、すぐ目の前にある門の入口が、どうしても見つからなかつたのである。家人は私が、まさしく狐に化かされたのだと言つた。狐に化かされるという状態は、つまり心理学者のいう三半規管の疾病であるのだろう。なぜなら学者の説によれば、方角を知覚する特殊の機能は、耳の中にある三半規管の作用だと言ふことだから。

余事はとにかく、私は道に迷つて困惑しながら、あてずいりよう当推量で見当をつけ、家の方へ帰

ろうとして道を急いだ。そして樹木の多い郊外の屋敷町を、幾度かぐるぐる廻ったあとで、ふと或る賑やかな往来へ出た。それは全く、私の知らない何所かの美しい町であった。街路は清潔に掃除されて、鋪石がしつとりと露に濡れていた。どの商店も小綺麗にさっぱりして、磨いた硝子の飾窓には、様々の珍しい商品が並んでいた。珈琲店の軒には花樹が茂り、町に日蔭のある情趣を添えていた。四つ辻の赤いポストも美しく、煙草屋の店にいる娘さえも、杏のように明るくて可憐であった。かつて私は、こんな情趣の深い町を見たことがなかった。一体こんな町が、東京の何所にあつたのだろう。私は地理を忘れてしまった。しかし時間の計算から、それが私の家の近所であること、徒歩で半時間位しか離れていないいつもの私の散歩区域、もしくはそのすぐ近い範囲にあることだけは、確実に疑いなく解つていた。しかもそんな近いところに、今まで少しも人に知れずに、どうしてこんな町があつたのだろうか？

私は夢を見ているような気がした。それが現実の町ではなくって、幻燈の幕に映つた、影絵の町のように思われた。だがその瞬間に、私の記憶と常識が回復した。気が付いて見れば、それは私のよく知っている、近所の詰らない、ありふれた郊外の町なのである。いつものように、四ツ辻にポストが立って、煙草屋には胃病の娘が坐っている。そして店々

の飾窓には、いつもの流行おくれの商品が、埃^{ほこり}っぽく欠^{あくび}伸^{のび}をして並んでいるし、珈琲店の軒には、田舎らしく造花のアーチが飾られている。何もかも、すべて私が知っている通りの、いつもの退屈な町にすぎない。一瞬間の中に、^{うち}すっかり印象が変ってしまった。そしてこの魔法のような不思議の変化は、単に私が道に迷って、方位を錯覚したことだけに原^は因^{いん}している。いつも町の南はずれにあるポストが、反対の入口である北に見えた。いつもは左側にある街路の町家が、逆に右側の方へ移ってしまった。そしてただこの変化が、すべての町を珍しく新しい物に見せたのだった。

その時私は、未知の錯覚した町の中で、或る商店の看板を眺めていた。その全く同じ看板の絵を、かつて何所かで見たとあると思った。そして記憶が回復された一瞬間に、すべての方角が逆転した。すぐ今まで、左側にあつた往来が右側になり、北に向って歩いた自分が、南に向って歩いていることを発見した。その瞬間、磁石の針がぐるりと廻って、東西南北の空間地位が、すっかり逆に変ってしまった。同時に、すべての宇宙が変化し、現象する町の情趣が、全く別の物になってしまった。つまり前に見た不思議の町は、磁石を反対に裏返した、宇宙の逆空間に実在したのであった。

この偶然の発見から、私は故意に方位を錯覚させて、しばしばこのミステリーの空間を

旅行し廻った。特にまたこの旅行は、前に述べたような欠陥によって、私の目的に都合がよかつた。だが普通の健全な方角知覚を持つてゐる人でも、時にはやはり私と同じく、こうした特殊の空間を、経験によつて見たであろう。たとえば諸君は、夜おそく家に帰る汽車に乗つてゐる。始め停車場を出発した時、汽車はレールを真直に、東から西へ向つて走つてゐる。だがしばらくする中に、諸君はうたた寝の夢から醒める。そして汽車の進行する方角が、いつのまにか反対になり、西から東へと、逆に走つてゐることに気が付いてくる。諸君の理性は、決してそんなはずがないと思う。しかも知覚上の事実として、汽車はたしかに反対に、諸君の目的地から遠ざかつて行く。そうした時、試みに窓から外を眺めて見給え。いつも見慣れた途中の駅や風景やが、すっかり珍しく變つてしまつて、記憶の一片さえも浮ばないほど、全く別のちがつた世界に見えるだろう。だが最後に到着し、いつものプラットホームに降りた時、始めて諸君は夢から醒め、現実の正しい方位を認識する。そして一旦それが解れば、始めに見た異常の景色や事物やは、何でもない平常通りの、見慣れた話らない物に變つてしまふ。つまり一つの同じ景色を、始めに諸君は裏側から見、後には平常の習慣通り、再度正面から見たのである。このように一つの物が、視線の方角を換へることで、二つの別々の面を持つてゐること。同じ一つの現象が、その隠された「秘

密の裏側」を持つてるといふことほど、メタフィジックの神秘を包んだ問題はない。私は昔子供の時、壁にかけた額の絵を見て、いつも熱心に考え続けた。いったいこの額の景色の裏側には、どんな世界が秘密に隠されているのだろうか。私は幾度か額をはずし、油絵の裏側を覗いたりした。そしてこの子供の疑問は、大人になった今日でも、長く私の解きがたい謎なぞになつてゐる。

次に語る一つの話も、こうした私の謎に対して、或る解答を暗示する鍵かぎになつてゐる。読者にしてもし、私の不思議な物語からして、事物と現象の背後に隠れてゐるところの、或る第四次元の世界——景色の裏側の实在性——を仮想し得るとせば、この物語の一切は真マ実リアルである。だが諸君にして、もしそれを仮想し得ないとするならば、私の現実に経験した次の事実も、所詮しよせんはモルヒネ中毒に中枢を冒された一詩人の、取りとめもないデカダンスの幻覚にしか過ぎないだろう。とにかく私は、勇気を奮つて書いて見よう。ただ小説家でない私は、脚色や趣向によつて、読者を興すべがらせる術すべを知らない。私の為なし得ることは、ただ自分の経験した事実だけを、報告の記事に書くだけである。

その頃私は、北越地方のKという温泉に滞留していた。九月も末に近く、彼岸を過ぎた山の中では、もうすっかり秋の季節になっていた。都会から来た避暑客は、既に皆帰ってしまった。後には少しばかりの湯治客が、静かに病を養っているものであった。秋の日影は次第に深く、旅館の侘しい中庭には、木々の落葉が散らばっていた。私はフランネルの着物をきて、ひとりで裏山などを散歩しながら、所在のない日々の日課をすごしていた。

私のいる温泉地から、少しばかり離れた所に、三つの小さな町があった、いずれも町というよりは、村というほどの小さな部落であったけれども、その中の一つは相当に小ぢんまりした田舎町で、一通りの日用品も売っているし、都会風の飲食店なども少しはあった。温泉地からそれらの町へは、いずれも直通の道路があつて、毎日定期の乗合馬車が往復していた。特にその繁華なU町へは、小さな軽便鉄道が布設されていた。私はしばしばその鉄道で、町へ出かけて行って買物をしたり、時にはまた、女のいる店で酒を飲んだりした。だが私の実の楽しみは、軽便鉄道に乗ることの途中にあつた。その玩具のような可愛い汽車は、落葉樹の林や、谷間の見える山峡やを、うねうねと曲りながら走って行った。

或る日私は、軽便鉄道を途中で下車し、徒歩でU町の方へ歩いて行った。それは見晴しの好い峠の山道を、ひとりでゆっくり歩きたかったからであつた。道は軌道に沿いながら、林の中の不規則な小径を通つた。所々に秋草の花が咲き、赫土の肌が光り、伐られた樹木が横たわつていた。私は空に浮んだ雲を見ながら、この地方の山中に伝説している、古い口碑のことを考えていた。概して文化の程度が低く、原始民族のタブーと迷信に包まれているこの地方には、実際色々な伝説や口碑があり、今でもなお多数の人々は、真面目に信じているのである、現に私の宿の女中や、近所の村から湯治に來ている人たちは、一種の恐怖と嫌悪の感情とで、私に様々のことを話してくれた。彼らの語るところによれば、或る部落の住民は犬神に憑かれており、或る部落の住民は猫神に憑かれている。犬神に憑かれたものは肉ばかりを食ひ、猫神に憑かれたものは魚ばかり食つて生活している。

そうした特異な部落を称して、この辺の人々は「憑き村」と呼び、一切の交際を避けて忌み嫌つた。「憑き村」の人々は、年に一度、月のない闇夜を選んで祭礼をする。その祭の様子、彼ら以外の普通の人には全く見えない。稀れに見て來た人があつても、なぜか口をつぐんで話をしない。彼らは特殊の魔力を有し、所因の解らぬ莫大の財産を隠している。等々。

こうした話を聞かせた後で、人々はまた追加して言った。現にこの種の部落の一つは、つい最近まで、この温泉場の附近にあった。今ではさすがに解消して、住民は何所かへ散ってしまったけれども、おそらくやはり、何所かで秘密の集団生活を続けているにちがいない。その疑いない証拠として、現に彼らのオクラ（魔神の正体）を見たという人がある。こうした人々の談話の中には、農民一流の頑迷さが主張づけられていた。否でも応でも、彼らは自己の迷信的恐怖と实在性とを、私に強制しようとするのであった。だが私は、別のちがった興味でもって、人々の話を面白く傾聴していた。日本の諸国にあるこの種の部落的タブーは、おそらく風俗習慣を異にした外国の移住民や帰化人やを、先祖の氏神にもつ者の子孫であろう。あるいは多分、もつと確実な推測として、切支丹宗徒の隠れた集合的部落であったのだろう。しかし宇宙の間には、人間の知らない数々の秘密がある。ホレーシオが言うように、理智は何事をも知りはしない。理智はすべてを常識化し、神話に通俗の解説をする。しかも宇宙の隠れた意味は、常に通俗以上である。だからすべての哲学者は、彼らの窮理の最後に来て、いつも詩人の前に兜を脱いでる。詩人の直覚する超常識の宇宙だけが、真のメタフィジックの实在なのだ。

こうした思惟に耽りながら、私はひとり秋の山道を歩いていった。その細い山道は、徑路

に沿うて林の奥へ消えて行つた。目的地への道標として、私が唯一のたよりにしていた汽車の軌道レールは、もはや何所にも見えなくなつた。私は道をなくしたのだ。

「迷い子！」

瞑想から醒めた時に、私の心に浮んだのは、この心細い言葉であつた。私は急に不安になり、道を探そうとしてあわて出した。私は後へ引返して、逆に最初の道へ戻ろうとした。そして一層地理を失い、多岐に別れた迷路の中へ、ぬきさしならず入つてしまつた。山は次第に深くなり、小径は荆棘いばらの中に消えてしまつた。空しい時間が経過して行き、一人の樵夫きこりにも逢あわなかつた。私はだんだん不安になり、犬のように焦燥しながら、道を嗅かぎ出そうとして歩き廻つた。そして最後に、漸ようやく人馬の足跡のはつきりついた、一つの細い山道を発見した。私はその足跡に注意しながら、次第に麓ふもとの方へ下つて行つた。どつちの麓へ降りようとも、人家のある所へ着きさえすれば、とにかく安心ができるのである。

幾時間かの後、私は麓へ到着した。そして全く、思いがけない意外の人間世界を発見した。そこには貧しい農家の代りに、繁華な美しい町があつた。かつて私の或る知人が、シベリヤ鉄道の旅行について話したことは、あの満目こうりよう荒こうりよう寥たうたる無人の曠野こうやを、汽車で幾日も幾日も走つた後、漸く停車した沿線の一小駅が、世にも賑にぎわしく繁華な都会に見える

ということだった。私の場合の印象もまた、おそらくはそれに類した驚きだった。麓の低い平地へかけて、無数の建築の家屋が並び、塔や高樓が日に輝やいていた。こんな辺鄙な山の中に、こんな立派な大都會が存在しようとは、容易に信じられないほどであった。

私は幻燈を見るような思いをしながら、次第に町の方へ近付いて行った。そしてとうとう、自分でその幻燈の中へ這入^{はい}って行った。私は町の或る狭い横^{よこ}丁^{ちやう}から、胎内めぐりのような路^{みち}を通^{とお}つて、繁華な大通^{おとお}の中央へ出た。そこで目に映じた市街の印象は、非常に特殊な珍しいものであった。すべての軒^{のき}並^{なみ}の商店や建築物は、美術的に変つた風情^{ふぜい}で意匠^{いせう}され、かつ町全体としての集合美を構成していた。しかもそれは意識的にしたのでなく、偶然の結果からして、年代の錆^{さび}がついて出来てるのだった。それは古雅で奥床^{おくゆか}しく、町の古い過去の歴史と、住民の長い記憶を物語っていた。町幅は概して狭く、大通でさえも、漸く二、三間位^{げん}であった。その他の小路は、軒と軒との間にはさまれていて、狭く入混^{いりこ}んだ路地^{ろじ}になつた。それは迷路のように曲折しながら、石畳のある坂を下に降りたり、二階の張り出した出窓の影で、暗く隧^{トンネル}道^{だう}になつた路をくぐつたりした。南国の町のように、所々に茂つた花樹^{はな}が生^はえ、その附近には井戸があつた。至るところに日影が深く、町全体が青樹の蔭^{かげ}のようになつたりしていた。娼^{しょう}家^からしい家が並んで、中庭のある

奥の方から、閑雅な音楽の音が聴えて来た。

大通の街路の方には、硝子窓のある洋風の家が多かった。理髪店の軒先には、紅白の丸い棒が突き出してあり、ペンキの看板に Barbershop と書いてあった。旅館もあるし、洗濯屋もあつた。町の四辻に写真屋があり、その氣象台のような硝子の家屋に、秋の日の青空が侘しげに映っていた。時計屋の店先には、眼鏡をかけた主人が坐つて、黙つて熱心に仕事をしていた。

街は人出で賑やかに雑鬧していた。そのくせ少しも物音がなく、閑雅にひっそりと静まりかえつて、深い眠りのような影を曳いてた。それは歩行する人以外に、物音のする車馬の類が、一つも通行しないためであつた。だがそればかりでなく、群集そのものがまた静かであつた。男も女も、皆上品で慎み深く、典雅でおっとりとした様子をしていた。特に女は美しく、淑やかな上にコケチツシユであつた。店で買物をしている人たちも、往来で立話をしている人たちも、皆が行儀よく、諧調のとれた低い静かな声で話をしていた。それらの話や会話は、耳の聴覚で聞くよりは、何かの或る柔らかい触覚で、手触りに意味を探るといふような趣きだつた。とりわけ女の人の声には、どこか皮膚の表面を撫でるような、甘美でうっとりとした魅力があつた。すべての物象と人物とが、影のように往

来していた。

私が始めて気付いたことは、こうした町全体のアトモスフィアが、非常に繊細な注意によつて、人為的に構成されていることだった。単に建物ばかりでなく、町の気分を構成するところの全神経が、或る重要な美学的意匠にのみ集中されていた。空気のいささかな動揺にも、対比、均^{さんせい}斉、調和、平衡等の美的方則を破らないよう、注意が隅^{すみずみ}々まで行き渡つていた。しかもその美的方則の構成には、非常に複雑な微分数的計算を要するので、あらゆる町の神経が、異常に緊張して戦^{おの}いでいた。例^{たと}えばちよつとした調子はずれの高い言葉も、調和を破るために禁じられる。道を歩く時にも、手を一つ動かす時にも、物を飲食する時にも、考えごとをする時にも、着物の柄を選ぶ時にも、常に町の空気と調和し、周囲との対比や均斉を失わないよう、デリケートな注意をせねばならない。町全体が一つの薄い玻璃^{はり}で構成されている、危険な毀^{こわ}れやすい建物みたいであつた、ちよつとしたバランスを失つても、家全体が崩壊して、硝子が粉々に砕けてしまう。その安定を保つためには、微妙な数理によつて組み建てられた、支柱の一つ一つが必要であり、その対比と均斉とで、辛^{かろ}うじて支^さえていたのであつた。しかも恐ろしいことには、それがこの町の構造されてる、真の現実的な事実であつた。一つの不注意な失策も、彼らの崩壊と死滅を意味

する。町全体の神経は、そのことの危懼きくと恐怖で張りきっていた。美学的に見えた町の意匠は、単なる趣味のための意匠でなく、もつと恐ろしい切実の問題を隠していたのだ。

始めてこのことに気が付いてから、私は急に不安になり、周囲の充電した空気の中で、神経の張りきつてる苦痛を感じた。町の特殊な美しさも、静かな夢のような閑寂さも、かえってひっそりと気味が悪く、何かの恐ろしい秘密の中で、暗号を交かわしているように感じられた。何事かわからない、或る漠然ぼくぜんとした一つの予感が、青ざめた恐怖の色で、忙がしく私の心の中を馳かけ廻った。すべての感覚が解放され、物の微細な色、匂におい、音、味、意味までが、すっかり確実に知覚された。あたりの空気には、死屍ししのような臭気が充満して、気圧が刻々に嵩たかまつて行つた。此所ここに現象しているものは、確かに何かの凶兆である。確かに今、何事かの非常が起る！ 起るにちがいない！

町には何の変化もなかった。往來は相変らず雑鬧して、静かに音もなく、典雅な人々が歩いていった。どこかで遠く、胡弓こきゅうをこするような低い音が、悲しく連続して聴えていた。それは大地震の来る一瞬前に、平常と少しも変らない町の様子を、どこかで一人が、不思議に怪しみながら見ているような、おそろしい不安を内容した予感であった。今、ちよつとしたはずみで一人が倒れる。そして構成された調和が破れ、町全体が混乱おちいの中に陥入おちいつ

てしまう。

私は悪夢の中で夢を意識し、目ざめようとして努力しながら、必死に踉もがいている人のように、おそろしい予感の中で焦燥した。空は透明に青く澄んで、充電した空気の密度は、いよいよ刻々に嵩かさまつて来た。建物は不安に歪ゆがんで、病気のように瘠やせ細こつて来た。所々に塔のような物が見え出して来た。屋根も異様に細長く、瘠やせた鶏あしの脚あしみたいに、へんに骨きばつて畸形きけいに見えた。

「今だ！」

と恐怖に胸を動悸どうきしながら、思わず私が叫なんだ時、或る小さな、黒い、鼠ねずみのような動物が、街の真中を走はつて行いつた。私の眼には、それが実によくはつきりと映像された。何かしら、そこには或る異常な、唐突な、全体の調和を破るような印象が感じられた。

瞬間。万象が急に静止し、底の知れない沈黙が横たわった。何事かわからなかった。だが次の瞬間には、何なん人びとにも想像されない、世にも奇怪な、恐ろしい異変事が現象した。見れば町の街路に充満して、猫の大集団がうようよと歩いているのだ。猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫。どこを見ても猫ばかりだ。そして家々の窓口からは、髭ひげの生はえた猫の顔が、額縁の中の絵のようにして、大きく浮き出して現れていた。

戦慄せんりつから、私は殆んど息が止まり、正に昏倒こんとうするところであつた。これは人間の住む世界でなくて、猫ばかり住んでる町ではないのか。一体どうしたと言うのだろう。こんな現象が信じられるものか。たしかに今、私の頭脳はどうかしている。自分は幻影を見ているのだ。さもなければ狂氣したのだ。私自身の宇宙が、意識のバランスを失つて崩壊したのだ。

私は自分が怖こわくなつた。或る恐ろしい最後の破滅が、すぐ近い所まで、自分に迫つて来るのを強く感じた。戦慄が闇を走つた。だが次の瞬間、私は意識を回復した。静かに心を落付おちつけながら、私は今一度目をひらいて、事実の真相を眺め返した。その時もはや、あの不可解な猫の姿は、私の視覚から消えてしまつた。町には何の異常もなく、窓はがらんとして口を開あけていた。往来には何事もなく、退屈の道路が白つちやけてた。猫のようなものの姿は、どこにも影さえ見えなかつた。そしてすっかり情態が一変していた。町には平凡な商家が並び、どこの田舎にも見かけるような、疲れた埃つぽい人たちが、白昼かひの乾いた街を歩いていた。あの蠱惑こわくてき的な不思議な町はどこかまるで消えてしまつて、骨牌カルタの裏を返したように、すっかり別の世界が現れていた。此所に現実している物は、普通の平凡な田舎町。しかも私のよく知っている、いつものU町の姿ではないか。そこにはいつもの

理髪店が、客の来ない椅子を並べて、白昼の往来を眺めているし、さびれた町の左側には、売れない時計屋が欠伸あくびをして、いつものように戸を閉しめている。すべては私が知ってる通りの、いつもの通りに変化のない、田舎の単調な町である。

意識が此所まではつきりした時、私は一切のことを了解した。愚かにも私は、また例の知覚の疾病「三半規管の喪失」にかかったのである。山で道を迷った時から、私はもはや方位の観念を失喪していた。私は反対の方へ降りたつもりで、逆にまたU町へ戻って来たのだ。しかもいつも下車する停車場とは、全くちがった方角から、町の中心へ迷い込んだ。そこで私はすべての印象を反対に、磁石のあべこべの地位で眺め、上下四方前後左右の逆転した、第四次元の別の宇宙（景色の裏側）を見たのであった。つまり通俗の常識で解説すれば、私はいわゆる「狐に化かされた」のであった。

3

私の物語は此所で終る。だが私の不思議な疑問は、此所から新しく始まって来る。支那の哲人莊子そうちは、かつて夢に胡蝶こちょうとなり、醒めて自ら怪しみ言った。夢の胡蝶が自分であ

るか、今の自分が自分であるかと。この一つの古い謎は、千古にわたってだれも解けない。錯覚された宇宙は、狐に化かされた人が見るのか。理智の常識する目が見るのか。そもそも形而上けいじじょうの实在世界は、景色の裏側にあるのか表にあるのか。だれもまた、おそらくこの謎を解答できない。だがしかし、今もなお私の記憶に残っているものは、あの不可思議な人外の町。窓にも、軒にも、往来にも、猫の姿がありありと映像していた、あの奇怪な猫町の光景である。私の生きた知覚は、既に十数年を経た今日でさえも、なおその恐ろしい印象を再現して、まざまざとすぐ眼の前に、はつきり見ることができるのである。

人は私の物語を冷笑して、詩人の病的な錯覚であり、愚にもつかない妄想もうそうの幻影だと言う。だが私は、たしかに猫ばかりの住んでる町、猫が人間の姿をして、街路に群集している町を見たのである。理窟りくつや議論はどうにもあれ、宇宙の或る何所かで、私がそれを「見た」ということほど、私にとって絶対不惑の事実はない。あらゆる多くの人々の、あらゆる嘲笑ちやうしやうの前に立つて、私は今もなお固く心に信じている。あの裏日本の伝説が口碑くひしている特殊な部落。猫の精霊ばかりの住んでる町が、確かに宇宙の或る何所かに、必ず実在しているにちがいないということ。

青空文庫情報

底本：「猫町 他十七篇」岩波文庫、岩波書店

1995（平成7）年5月16日第1刷発行

1997（平成9）年12月5日第4刷発行

底本の親本：「萩原朔太郎全集 第五卷」筑摩書房

1976（昭和51）年1月25日

初出：「セルパン」

1935（昭和10）年8月号

※副題は底本では、「散文詩風な小説《ロマン》」となっています。

入力：ryoko masuda

校正：浜野智

1999年1月12日公開

2018年10月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

猫町

散文詩風な小説

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 萩原朔太郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>